

2025年11月27日(木)
中国新聞SELECT掲載

2024年、私は核兵器廃絶を訴える若者たちを取材するため広島を訪れた。広島空港（三原市）から赴任先の広島市立大広島平和研究所（安佐南区）までバスで向かう。トンネルを抜けると、これから約4カ月間、窓辺の風景となる山々が現れた。

到着翌日には最初のインタビュアーがあり、その後も予定がぎっしり。被調査者に次の候補者を紹介してもらおうと社会科学の手法を用いた聞き取り、若者が主導する活動への参加、長崎と東京出張もあつ

被爆80年 リレー エッセー



元広島平和研究所研究員
（英キール大大学院博士課程在籍）
フランコ・エスコバール

被爆者と対面 忘れ得ぬ体験

た。英国キール大で進めていた博士論文の成否は今回の調査がうまくいくかどうかにかかっていた。初めて対面した被爆者はピースボランティアとして08年から活動する岡本忠さんであった。忘れ得ぬ体験を聞いたこの出会いは私の研究において「問いの核心」を形

作るものとなった。「若者が被爆証言を聞くとはどういうことか」「被爆者がいなくなった後、証言はどうなってしまうのか」「若者はどう核兵器の概念を学び、反核運動に参加するようになるのか」

私が核軍縮に関心を持ったのは22年。米国の首都ワシントンでの研究員募集がきっかけだった。関連する本を読み始めると、例えよるのない衝撃を受け、学び続けようとの固い決意が芽生えた。昨今、核軍縮研究の資金獲得は容易でないが、広島平和研究所だけでなく、キール大アメリカ研究センター、英国チューリング計画、国連軍縮局「ユース非核リーダー基金」の三つの機関が研究活動を支えてくれた。

随時掲載します